2006年4月5日

セミナー通信　Ｖｏｌ．１４４

西村セミナールーム
主宰　西村　和彦

小学英語に期待すること

かつて明治維新の際に明治の政治家は、西欧諸国に対抗するためには国民全員の学力向上が不可欠として、４年間の義務教育を柱とする学制をしきました。もちろん江戸時代後期には武士や裕福な商人の子どもたちを対象にした寺子屋などの教育機関はあったものの、人口の大半を占める農民の子どもたちは農作業の重要な労働力であったため、親が子どもたちを学校に行かせることに猛反対したそうです。それでも国が親に対して「子どもに教育を受けさせる義務」を課したのは、富国強兵を目指す当時の日本にとって「読み・書き・そろばん」ができる国民が不可欠であると判断したからです。

中教審は義務教育である小学校教育に週１時間程度の英語を必修とするそうです。現在多くの小学校では総合学習で英語をすでにやっているからという本末転倒な理由によるもので、国家百年の計を微塵も感じさせないところが情けない限りです。

「１０年後にアメリカの５１番目の州として併合されるため」とか「公用語を日本語から英語にかえるため」とかを真剣に考えて、そのために小学校英語の必修化が今是非とも必要であるとでも言い出すのならば､賛否は別にして考えるきっかけにもなりますが、「早くから習わせた方が、英語に慣れるから」という理由では相手をする気も起きません。

それは「プロを目指すわけではないが、子どもの可能性を少しでも伸ばしてあげたい」ということでサッカーや野球、スイミング、ピアノ、ゴルフなどを習わせる親の意識であり、経済的・時間的余裕があれば「どうぞご自由に」といったものでしかないはずです。

いまさらいうまでもありませんが、私個人の意見としては「必要なし」と考えています。ただ「どうしても」導入するというのであれば、２つほど期待したいことがあります。

ひとつはできるだけたくさんの身近な単語（名詞）を覚えること。もうひとつは基本的な動詞や前置詞の本質的な感覚（ニュアンス）をつかむことです。記憶力がピークになる時期ですから、中学になってからの負担軽減になれば悪くはないかもしれません。ただ、今中学でおこなっている文法事項が絡む内容は小学校では一切やらなくてよいと思います。

さて、いまだに「ゆとり教育」の責任もとらない文部科学省のお役人の次の計画はどうなるのでしょうか。

’05年度塾生通知表評定平均

9科目別平均	英語	数学	国語	社会	理科	*5科目計*	音楽	美術	保体	技術	*9科目計*
卒塾生	**4.8**	**4.4**	4.2	4.0	4.0	*21.4*	4.2	3.8	4.2	4.2	*37.8*
新中３	**4.0**	**3.7**	3.7	3.7	3.7	*18.7*	3.0	3.7	3.3	3.3	*32.0*
新中２	**5.0**	**5.0**	4.4	4.6	4.6	*23.6*	4.0	3.8	4.2	4.2	*39.8*

５科目別内申評定割合（%）

	英語	**数学**	国語	社会	理科
5	**77**	**54**	31	38	23
4	**15**	**38**	62	46	69
3	**8**	**8**	0	8	8
2	**0**	**0**	8	8	0
1	**0**	**0**	0	0	0

９科目合計内申点割合（%）

	’05年度	’04年度	’03年度
40～45	**２３**	３２	５４
36～39	**５４**	４４	３５
32～35	**１５**	１２	4
27～31	**0**	4	8
9～26	**8**	8	0